

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

教育相談 第 118 号

—小、中、高等学校対象—

平成16年10月発行

児童生徒理解に生かす教育相談

少年非行の増加とその低年齢化、悪質化が社会問題となっている。さらに、最近では今まで目立った問題行動が見られなかった児童生徒が突然、問題行動を起こしたり、いじめの問題を起こしたりする事例も発生している。

教育相談は、本来すべての児童生徒を対象に行うべきものである。しかし、これまでは不登校やいじめ、問題行動などが表面化している児童生徒を対象にした相談に偏りがちな傾向がみられる。

そこで、本稿では問題が表面化していない、見過ごしがちな児童生徒に焦点を当て、児童生徒理解に生かす教育相談の在り方について述べる。

1 児童生徒理解を深めるための視点

教師が、児童生徒理解を進めるとき、児童生徒一人一人に焦点を当て、個別的理解を深めていくことが必要である。ここでは、個別的理解を深めるための視点について述べる。

(1) 多面的な理解

児童生徒の日常の観察だけでなく、絵画や日記、作文などを通して、児童生徒の欲求や興味・関心、他者とかかわる態度などを知ることが児童生徒とかかわっていく上で有用な情報となる。また、多くの教師と情報交換することは指導方針の偏りを補う意味で効果が期待できる。

(2) 客観的な理解

教師の主観的な理解を補うためには、心理検査や標準化されたテスト、アンケート調査などを利用することが有効である。ただし、

心理検査等の結果によって、児童生徒を固定化して見てしまうことがないように注意しなければならない。

(3) 共感的な理解

児童生徒の話に耳を傾け（傾聴）、受け止め（受容）、児童生徒の心で感じ取る（共感）ことが大切である。そのためには、児童生徒一人一人を「かけがえのない存在」、「自らよりよく成長するもの」としてとらえる児童生徒観に立つことが求められる。

2 教育相談における教師の姿勢

教育相談における教師の姿勢として、次に主なポイントを述べる。

(1) 児童生徒の行動の背後にあるものを理解しようとする態度

行動に至る動機だけでなく、生育歴、親子関係、友人関係、現在の性格・行動傾向などが形成された背景を理解することは、指導・援助をする際に大切である。

(2) 児童生徒の内面理解

児童生徒の気持ちや感情、自己概念などの内面について知ることは、適切な指導・援助を検討する際に役立つ。

(3) 安心して何でも話せる関係

安心感や信頼感に満ちた関係が構築できれば、児童生徒は教師の助言等を素直に受け止めることができるようになる。

こうした教師の姿勢を通した児童生徒とのかかわりが、児童生徒が自分自身で問題に気づき、あるべき姿について考え、自己決定していく力を身に付けさせることにつながるのである。

3 見過ごしがちな児童生徒への教育相談の在り方

ここでは、見過ごしがちな児童生徒の例と、その対応例を示す。

(1) 見過ごしがちな児童生徒の例

	学校での様子	考えられる心理的背景等
素直なタイプ	教師の言うことをよく聞き、素直に行動に移す。また、周囲の児童生徒との協調性も大事にしている。 その一方で、ささいなことにこだわったり、小さな失敗を気にしたりすることがある。	「人に頼まれたことは引き受けなくてはならない」、「失敗してはいけない」、「親の期待にこたえなくてはならない」など、自分の思いや願いが強すぎる一面がある。 自己主張ができず、不安や心配、抑制の感情などからストレスが蓄積しやすい傾向がある。
明るいタイプ	いつもにこにこし、笑っていることが多く、明るく元気である。 その一方で、自分がどう思われているか聞いたり、気にしたりすることがある。時には、疲れている様子、集中力がない様子がうかがえる。	「明るく振る舞わなければならない」、「クラスの友だちに認められたい」という思いから、無理して明るく振る舞っていることがある。 自分に自信がなく、自己肯定感が低いことがある。 精神的に疲れやすく、ストレスも蓄積しやすい傾向がある。
世話好きなタイプ	学級活動や委員会活動などで、積極的に活動している。また、責任感が強く、自分のことより級友のことを優先して行動していることが多い。 その一方で、自分の思いを押し付けるといった一面も見られる。	「友達には親切にしなければならない」、「困っている人がいれば、助けなければならない」など、自分の思いが強すぎる一面が考えられる。 人のためにエネルギーを使い過ぎてしまい、精神的に疲れ、自分のことができない場合がある。 世話好きの度が過ぎることで、かえって「おせっかい」、「しつこい」など、相手の不満を招き、嫌がられる場合もある。

(2) 対応例

① 素直なタイプ 小学生A男のケース

A男は、普段はおとなしく口数も少ないが、教師の指示や友達から依頼されたことには素直に応じ、最後までやり通す粘り強さをもっている。そのため級友からの信望も厚い。2学期の運動会后、沈んだ元気のない様子が見られた。

A男の様子が気になった担任は、A男に声を掛け、放課後、呼び出し相談を行った。A男との相談の中から、運動会の準備で多くの仕事を引き受け、体力的にも疲れたこと、準備が十分でなかったことで、みんなに迷惑をかけたなどと悩んでいることが分かった。

A男の心理状態

- ◆ 自分が頑張れば、級友に喜ばれる。
- ◆ 友達の期待にこたえたい。
- ◆ 人に頼まれたことは、いやでも引き受けなければならない。
- ◆ 友達と協調していくためには、自分が我慢すればよい。
- ◆ 友達の失敗は許せるが、自分は失敗してはいけない。

など

**A男への
主な
指導・援助**

- 頑張り過ぎて精神的にも無理があったのではないかと考え、気持ちを楽しんで、睡眠を十分取る等、体を休めるよう助言した。
- 周囲の評価を気にしすぎると、ストレスが強くなったり、落ち込んだりすることもあると助言した。
- 時には、自分の意見をはっきり言ったり、頼まれごとを断ったりするなど、自己主張することの大切さに気付かせた。

家庭との連携

- ◇ 家庭との情報交換を行い、A男が家庭でも気持ちを楽しめるようかかわるなど、家庭の理解、協力をお願いした。
- ◇ 自分に自信がもてなくなっている傾向がみられるA男に対して、家庭では褒めて自信をもたせるようなかかわりを提案した。

対応のポイント

- ◎ A男の変化に担任が気づき、廊下で出会った機会をとらえ、チャンス相談から呼び出し相談につなげた。
- ◎ 教育相談を通してA男の悩みや課題が判明し、早期対応が図られた。
- ◎ 家庭でのA男へのかかわりについての理解、協力が得られ、連携が図られた。

② 明るく、世話好きなタイプ 高校生B子のケース

B子は明るく活動的な生徒であり、成績も上位で学級役員の仕事もしっかりこなしていた。クラスマッチや文化祭などでもリーダーシップを発揮し、クラスをよくまとめていた。また、家庭においても家事手伝いを頑張るなど、特に問題がないと思われる生徒であった。

ところが、文化祭の後、体調不良を訴え、保健室で休むことが多くなった。本人に理由を聞いた養護教諭から、「文化祭での学級企画を強く要望したが受け入れられず、数人の生徒に非難されたことを悩んでいるようだ」との連絡を受けた。

**B子の
心理状態**

- ◆ このクラスをよくするために頑張りたい。
- ◆ 明るく振る舞うことで、クラスの雰囲気をよくしたい。
- ◆ 勉強も頑張ることで、教師や級友からの信頼を得たい。
- ◆ 自分の考えは正しく、私の考えに皆、賛成してくれるはずだ。
- ◆ 親にも、自分の頑張りを評価されたい。

など

**B子への
主な
指導・援助**

- 家事手伝いの後、夜遅くまで勉強するなど、頑張りすぎて体力的にも無理があったことから、睡眠を十分取ることを勧めた。
- 人のために頑張ることにも限界があることや「こうでなければならぬ」といった考え方などを変えるよう助言した。
- 人にはそれぞれの考えがあり、あまり自分の主張を通そうとすると「おせっかい」、「迷惑」と感じられる場合もあると気付かせた。

家庭との連携

- ◇ B子の保護者との情報交換を行い、B子の心理状態を説明し、家庭でも無理をさせない取組やB子の心理状態の理解について協力を依頼した。
- ◇ 学校でのB子への指導・援助について説明し、理解を得た。
- ◇ 保護者との触れ合いが少ないことに寂しさを感じている面もあり、そのことを保護者に伝え、理解、協力を得た。

対応のポイント

- ◎ 養護教諭がB子の変化に気づき、その後連絡を受けた担任が教育相談を通して、悩みや内面の理解に努めた。
- ◎ 養護教諭と担任、担任と家庭との連携によって、B子についての共通理解が図られた。
- ◎ 保護者も学校からの提案に協力的で、家庭においても適切な対応や援助が行われた。

4 家庭との連携

児童生徒には、学校と家庭で行動に二面性が見られこともあり、児童生徒への適切な指導・援助を進めるには、家庭との連携が重要である。

そのためにも、児童生徒の変化に気付いた時点で、様々な方法で児童生徒理解を深めると同時に、家庭と連絡を取り、学校での児童生徒の様子を知らせ、家庭での様子や態度に変化がないかなどの情報を交換することが大切である。

また、家庭での理解、協力を求める際の保護者への声掛けは、指示的、指導的な色合いにならないよう配慮し、「・・・のような接し方はどうですか」といった援助的な話し方に努め、「〇〇君のことを学校と家庭で一緒に考えて行きましょう」という姿勢で対応することが大切である。

このような働き掛けが、保護者に安心感と信頼感を与え、よき協力者として共に問題解決に臨む際の基盤となる。

家庭との連携を図るポイントは、保護者と教師との信頼関係にある。日ごろから、児童生徒の生活状況について情報交換するなど家庭との連絡を密にし、保護

者との信頼関係づくりに努めることが大切である。

教育相談は、児童生徒一人一人が身体的・心理的な健康を維持しながら望ましい人格を形成し、学校生活への適応を高め、将来の社会生活に必要な対処能力を獲得できるようにするために行うものである。

ここでは、児童生徒の中でも見過ごしがちな児童生徒への対応例について述べてきた。学校においては、こうした児童生徒を含むすべての児童生徒の変化を見逃すことなく、適切に対応することが大切である。

そのためにも、校内の教育相談体制の整備はもとより、カウンセリング技法習得のための校内研修の工夫、改善が求められる。

【参考文献】

- 菅野 純 著『心の声、聞こえていますか』1994 瀝々社
- 小泉英二 編著『学校教育相談・初級講座』1995 学事出版
- 國分康孝 監修『教室で気になる子』2003 図書文化
- 鹿児島県総合教育センター 研究紀要第94号
- 「学校における教育相談活動の充実をめざす研究」
平成12年3月
(教育相談課)